

まず、編集長からの解説

これは私達のゼミ生（村本邦子・中村正・尾上明代・団士郎の4人が担当する立命館大学大学院・応用人間科学研究科・対人援助領域「家族機能・社会臨床クラスター」）の一人である北村真也君が、ほぼ毎週、提出してくる多量のエピソード記録です。そこには、中村正さんと北村君が二週間に一度、定期的に持っているオフィスアワーを核に、いろんな人や物、場が複合的に思考、展開していく様子が大量に書かれています。

それを読んでいると、いつも何かざわざわとうごめき出しました。編集プランを考えていた私には、彼らの対話のあちこちに、「対人援助学マガジン」への提案やエールを感じ取れたのです。無論、マガジンとは関わりのない、修論構想の指導として始められた対話です。しかし知っている事を明確に意識化し、眼前のものは何であるのかを、はっきりと見たいと強く願う北村君の感覚は、新しくスタートさせようとしている雑誌と激しく同期しました。

社会人入学生である北村君（私は古い知人なので、こう書いてしまいますが、一般には北村さんが適切）は48歳の立派なおじさんで、長年、信念を持って経営してきた塾のオーナーです。その画期的な塾「アウラ学びの森」の実践を表すためのオリジナリティある言葉探しと理論化に取り組んでいるプロセス（オフィスアワー）を、連載してもらおうと思ったのです。そこでまず、第一回目は「アウラ学びの森」とは何なのか。まだ中村先生は登場しません。

場と会う 人と会う

中村先生との対話

序

アウラを語る

北村真也

京都府の要職にあるAさんが、アウラに自転車でやってこられました。自宅のある京都市内から亀岡まで…。最初電話で「自転車でいきますから」と連絡が入った時は、思わず「エッ」と声を出してしまいました。

今回の話は、まずアウラはどういった学びの空間なのかというAさんの問いから始まります。

「すごい教室ですね。アウラは小学生から高校生くらいまで来られるんですか？」

「まあ一応、小学生から高校3年までということになってるんですが、大学に入学した生徒もここで手伝ってくれてるんです。スタッフとしてね…。それはそれで、お給料を支払いながら、一方でコミットしていくので彼らの学びの場でもあるわけですね。また、私は今大学院に籍があるので、この間なんかは、院生が大勢やってきて、5時間くらい議論をするわけですよ。大人の方も時々、やってきて専門学校への入学に向けた学習をやったりするんですよ。とにかくこの教室は、席が30余りあるんですが、中学生がやっている横で、その大人の方がやったり、とにかく混在するんですよ」

「基本は自習なんですか？」

「そうですね。私たちは自律学習と呼んでいますが、みんな自分で学ぶんです」

「みんな自分の勉強を持ってくるんですか？」

「カリキュラムは、一緒に作るんです。ひとりずつ」

「ひとりずつ…」

「普通の学校は、カリキュラムが先にあって、子どもたちはそれに合わさないといけないでしょ。でもアウラでは、ひとりずつカリキュラムを作っていくと…、だから生徒の数だけカリキュラムがあるわけです。それでやってるうちに、カリキュラムが合わなくなってくると、ガイダンスをおこなって、カリキュラムの修正をおこなうんです」

「先生は何人くらいおられるんですか？」

「今は13名ですね」

「そこに生徒が…」

「100名くらいですね」

「ということは、ここに生徒が30名くらいいると…」

「教室には、先生は3、4名くらいですね」

「先生は、何聞かれても答えられるんですね」

「一応文系の先生と理系の先生には分かれてるんですが、生徒の質問にはたいいてい対応しています。ただ生徒の自律度が向上すれば、生徒はあまり質問しなくなっていきます。自分で問題解決しますから。そうすると先生は、もっと概念的なことを語ったり、これからどう学んでいくかを一緒に考えたりする役割を担いますね」

「なるほど、すると黙々とここで勉強していくわけですね」

「そう、黙々とやりますね。長い子だったら5時間くらいやりますよね。それで帰る時にレポートを書いて帰るんですよ。今日のまとめをね」

「アウラは、学校に行っていない子どもばかりが通ってるんですか？」

「いやそうではないです。学校に通っていないいわゆる不登校の生徒は、現在6名です。そのほかの多くは塾として、学校が終わってから来ています。アウラはもともと私塾としてスタートしたんです」

「ああ、そうなんですか」

「私はもともと不登校の生徒を対象にする予定もなかったんですが、たまたま中学を3年間行かずに家に引きこもっていたある男の子がアウラにやってきたんです。この子をどうしようと考えて始まったのが、アウラのフリースクール、サポート校部門である知誠館なんです」

「なるほど…」

「アウラは、もともと午後2時頃から夜11時頃まで開かれていたんですが、昼夜逆転の不登校の生徒がやってきたことで朝10時から夜11時まで開かれるようになったんです。学校に行っていない子らは、朝10時からやってきて、夕方に帰るんですよ。とにかくアウラは、新しい生徒との出会いによって、どんどん変わってきたわけですよ」



「北村さんは、先ほど私塾とおっしゃいましたが、進学塾なんですか、それとも補習塾なんですか？」

「そういうカテゴリーに入らないかもしれませんね」

「もともと親はどういう風に、したいんですかね。働いてるから子どもを預けたい？」

「それは塾に通わせて、学力をあげたいという動機が一番多いと思いますよ。だから、アウラの入り口は、塾なんです。そこには、進学塾も補習塾も、あるいは不登校であれば、フリースクールも、居場所も、それらをすべて含んでいるんですよ。一般的にいわれる教科的な力をつけることは、そんな難しいことじゃないと思うんです。子どもたちが学習に対して主体的に集中して取り組むことができれば、自ずと力がついていくわけですよ。私はむしろその奥にあるものに関わりたい。アウラでは、子どもたちは誰もが自律的に学んでいます。このことは前提なんです。自律的な学びは、*学びの型 Learning Literacy* を構築させます。だから、英語と数学しか学習してない生徒の理科や社会の成績が上がったりするんです。それは、彼らが *学びの型* を身につけたからですよ。自律的に学ぶ型を…。そして私なんかは、そんな風に自律的に学ぶ子どもに一人一人声をかけていくんです。すると様々なものが見えてきます。例えば、わからない問題に出会った時に、すぐ諦めてしまったり、あるいは誰かに依存しようとしたり、そこには理解の背景にあるその子の行動パターンや、物事をどう認知するかといったパターンが見えてくるわけです。私たちはそこにコミットしていくことで、子どもたちが自ら変容していくことを期待しているんです。さらにどうして変容が必要かという、彼らの学習観は、常に正解、すなわち一つの答えに収束していくと

いった学習観でしかないからです。いわゆる 収束型の学び です。でも、大学で研究したり、社会の中で開発をしたりする創造的な活動は、答えをどんどん作りだしていく作業であって、ネットワークが拡大していく過程であると思うんです。いわゆる 生産型の学び です。だから、子どもたちの学びを 収束型の学び から 生産型への学び へと転換していくためにも、彼らの学習観が揺ぶっていきなりたいところがあるわけですよ。私の中には、「人が学ぶということは、果たしてどういうことなのだろうか？」といった問題提起があって、それを子どもたちに対しても問いかけていきたいということがあるんです。でもこれを最初から親にアピールしてもなかなか、理解されないわけですよ。そんなことは...

「でしょうね」

「だからね、親御さんに直接的には伝えにくい。例えば...、これアウラのチラシなんですよ。子どもが写真撮ったんですよ。生徒の目線でアウラはどう映っているかという...、そういうものを巻に出して行くんですよ。少し普通の塾とは違うでしょ、でも塾なんです」

「普通の塾のチラシには、 高校何人、とか書いてあるじゃないですか？」

「それは、今まで1回も載せたことがない」

「それは、あえて戦略的にそうしてるんですか？」

「戦略というか、受験合格は、生徒の手柄だっていう私のこだわりかもしれません。でもまあ、こういう一風変わったチラシを出してるんで、それに興味を持つ人がやってくるのかもしれないね」

「なるほど」

「私たちは生徒の選別を一切してないんで、できる子からできない子まで実に様々な生徒がやってくるわけですよ。偏差値でいえば、それこそ30くらいの学習障害傾向を持つ子から、80くらいの子までいるわけです。まさに混在の世界なんです」

「まあ考えてみれば、自分も家で勉強したことがないんです。帰り際に青少年センターがあって、その自習室でみんな勉強してたな。無ずっと通い続けた。そこがなければ、大学に入ってなかった。で、そこにわかんないことがあれば説明してくれる先生がいて、考えてみれば理想かもしれんな。塾に通ってるあいだって受け身ですもんね。自習で聞きたい時に聞けて、しかも自分がある一定の緊張状態における空間。ある意味理想の空間かも知れませんね」

「学校だったら、授業中に先生が一人でしゃべっているけど、ここはいつもクラシック音楽が鳴り響いていて、そんな中でみんな学習を続けてるんです。でもまったく誰もしゃべってないわけじゃない。みんなそれぞれに何かはしゃべてるんです。うるさすぎず、静かすぎず...。その間に、誰もが集中できるポイントがあるんです。そのポイントをみんなが意識できるようになっていくわけです」

「そういった意味では、よく考えられたすごい空間ですよ」

“空間”ということをめぐる話は、アウラ以前のことへと進展していきました。私がどうして“空間”あるいは“場”ということにこだわりを持つようになっていったのか、そんなことが話の中で紹介されます。

「アウラの設立コンセプトの中で私が一番こだわったのが、この“空間”ということなんです。私がアウラを作ったのは2000年なんですけど、その背景には、90年代に入って、子どもたちにどこか声が届かなくなってきたという思いがありました。私は大学を卒業した84年から教育に関わるわけですが、当時はまだ“校内暴力”というコトバが巷に氾濫していた時代でした。彼らは、学校や教師に反発していた。反発と

というのは、関係を持つとするとする一つの表れですよ。いわゆる反社会的行動。それが、90年代以降少しずつ減りはじめ、いわゆる無反応、非社会的行動に変わりつつあったように思うんです。生徒は、だんだんいい子になっていき、特別問題を起こさなくなったんですが、どこまで話が伝わってるんだろうという疑問が私の中で大きくなっていったんです」

「北村さんは、80年代はどこかの学校におられたんですか？」

「いや、私は学生時代から私塾を始めていたんです。学校では働いた経験がありません。実は私を私塾の世界へと導いてくれたのは『教育に強制はいらない』という1冊の本でした。この本は当時北海道新聞の大沼安史が、70年代のアメリカのオルタナティブ教育の現場を日本に紹介した最初のものでした。そして当時、学生だった私は、結構インパクトを受けたわけです。当時のアメリカ西海岸では、ベトナムの反戦運動が盛んで、平和主義に基づいた市民たちのムーブメントが背景にあったんですが、そんな中、自分たちの子どもの教育は自分たちでおこなうという考えがオルタナティブスクールを登場させたんです。1軒の家が学校になっていくわけです。すごいあって思いましたよ。それで、そんなこと日本でも始めたいと思って、学生時代に京都の町屋を一軒手に入れて、私は私塾をスタートさせたわけです。リベラリズムをベースにした私たちと子どもたちが一緒になって作るもう一つの学校、あるいはもう一つの家のような塾でした」

「そうだったんですか？」

「それが先の話にあったように、90年代に入ってから、私の中に疑問が浮上するようになったんです。私の世代は、『われら青春』とか『飛び出せ青春』のいわゆる青春ドラマを観て育ってるんです。だから、どこかにパフォーマンス系の先生像がその理想としてあったんだと思うんです。ところがコトバがうまく伝わらないという状況になって、どこか根本的に見直さないといけなくなってきたんです。そこで目を付けたのが 身体 だったんです。そして 身体 と結びつくのが 環境 だから、そこにこだわっていったんです。だから、環境 をどう考えるのかということ、これって20世紀の教育はあまり考えてこなかった点だと思うんです。今の学校は、大変無機質な空間ですよ。効率化の文脈の中で 環境 を切り取ってしまっている。だからこれは全然違うなって思ったんです。それで最初に思ったのは、私自身がモノを考えたり集中しやすい空間って何だろうって考えていったんです。それから、私という人間をこの空間の中にどうしみこませていけばいいかということ。私のこだわりとか...、そんなものをこの空間を媒介にして伝えていく。これをギブソンは“アフォーダンス”と呼んだんですね。このアフォーダンス理論は、アウラを作る時の重要なコンセプトだったんです。例えばこのヘゴシダの木、これはこの教室の中心、ここは13mの吹き抜けになってるんですが、ここに先生がいるんじゃなくこの沖縄からやってきた3mの高さの木があるわけです。スペースと自然、これがアウラ教育の象徴的なメッセージなんです。学びの中心にあるのは、スペースと自然なんです。私の机なんかは、教室の隅っこにあるんです。これサポーターの象徴なんです。だから、この配置一つとっても、私のこだわりがあって私のメッセージがあるんです。こんなことを私は直接彼らに伝えることはしないけれど、場を媒介にしてその身体に伝えていくんです」

「机の配置もかなり考えられたんですか？」

「かなり考えましたよ」

「本もすごいですよね」

「生徒の学習するものに混在する形で、私の研究領域の本が所狭しと並んでるんです」

「子どもたちは、よるこんで来るんですか？それとも来させられてるって感じなんですか？」

「よるこんで来ていると思いますよ。これ去年書いてもらった子どもたちのアンケートなんです。これ見

ていただくと、彼らがどんな思いでアウラにやってくるのかということがわかるかもしれません」

「気が散るものもないけど、押し付け感もないしね、それで集中できて...、本当に理想ですよ。周りが集中しているから自分も集中してしまうなんてこともありますしね。仕事もこんなところでできればいいんだけどな...」

「まあ最初にイメージとしてあったのは、“お茶室”なんですよ。待ちの部屋から中庭を通して、あの小さな入り口からお茶室に入る。そこは俗世界からどこか切り離された別世界なんですよ。アウラは、そんな場として認識されているんだと思うんです。だからみんな、ここに来るとなぜか集中できる、やる気になるなんて表現をしてくるんです。初めてアウラの教室にやってきた子どもたちは、みんな最初は戸惑うんですよ。“何やこの教室”ってまずこの有様に戸惑うんです。そして、そこで小学生から高校生まで入り乱れる形で自律的に学んでいる。先生からの指示が特別にあるわけでもないのに、自分たちでそれぞれが学んでいるんです。教室にはクラシック音楽が流れていて、適度な静けさが集中を誘う。彼にとっては、すべてがまるで別世界なんです。だから、そこで生まれ変わるわけなんです。彼らは、一旦自分たちの学習観を un-learn して、再び新しい学習観を re-learn していくんです。先生に“はい、これやってください”と言われてやっていく勉強から、自分でやっていく学習へ、あるいは、テスト前に必死で覚えてテストが終われば忘れてしまうという“勉強といえば覚えること”という学習観を何とかしたいんですよ。ただ、今のところ日本には受験という制度があるので、そこは無視できない。受験を否定することはしないんですよ」

「ここにきて、子どもたちも受験ということに勝ち残っていくことが一番になるわけですよ」

「受験ということが一番に来るかどうかはわからない。少なくとも私はそう捉えていない。受験を否定しないけれども、それを一番に持ってこない。そんなのは小さい世界、学びの世界というのはもっと広くて深いもの。私からすれば、一つの答えに集約できるものは、まあ言えばネットで拾えるようなものなんですよ」

「一般化されたものですよ」

「彼らはそこを通らないといけないのですが、私は何かしらのメッセージをだして行くんですよ」

「私のゼミというのがあるんですが、私はそこで結構彼らを揺さぶるわけですよ。雑談を交えながら...」

「それは何のゼミなんですか？」

「私は、数学の担当ですから、数学のゼミですよ。あくまで数学を通して彼らに揺さぶりをかけるわけです。私は今大学院に所属してますから、ある意味、先生をやりながら学生でもあるわけです。つまり彼らとある意味、同じ立ち位置にいるわけです。だからこそ、彼らに伝えられるものがあるのかもしれない」

「ゼミは、みんな受講するんですか？」

「希望する子だけ、選択制です」

「嫌がりませんか？ めんどくさいとか...」

「そんな生徒はいないと思いますよ。聞きたくない生徒はゼミをとらなくてもいい。授業は、生徒が聞きたいと思って初めて成り立つものですから、聞きたくない生徒は受講しなければいいだけです。このことは、はっきりと伝えてある。ゼミを受講しないという事実は、特にとがめられるものでもないわけです。ここは学校ではないので、ここにこなければならぬことは何一つないわけです」

「そうそう」

「来たいと思って来る。これが基本なんです。“君らには選ぶ権利がある。だからこそ私はやりたい教育をやる”このことがとても大切なんです」

「教材も決めてるんですか？ それとも持ち込みなんですか？」

「何をするかは、生徒との話し合いによって決まります。みんなが同じものを学習するって必要性がないので」

「週何回くらい来るんですか？」

「生徒によって違う。でも受験生になれば、週6日、アウラの住人のようになっていきますね」

その後、私はAさんにアウラの2階の教室を案内しました。アウラの1階の教室を自律学習がおこなわれる“静の空間”とすると、2階は、ゼミがおこなわれる“動の空間”。アウラには3つのゼミをおこなう教室があります。そしてあと残り一つの部屋が、ヨーロッパ調の大きなソファールが置いてある面談室。ここは、あらたまって子どもたちもしくは保護者と話をするためにあえて意図された空間です。アウラの2階にはホールがあり、そこから壁一面のガラス窓越しに、前の小学校の運動場と遠くの山々を見下ろすことができるのです。

「ここはゼミ室なんですか。“動の空間”ですね」

「先生も生徒もしゃべるわけですね。盛り上がります？」

「そうですね。私はいい感じだと思っています」

「ここが面談室です」

「これは、石油王の部屋みたいですね」

「ここはまた独特のムードでしょ」

「これはすごいですね。こんな調度品どこで買うんですか？ 輸入品ですか？」

「主にヨーロッパ製ですかね」

「ソファールも机もいいですね」

「ここからベランダへも出られるんですね。景色もいいですね。見晴らしがよくて...」

「アメリカにジョン・デューイという教育学者がいたんですよ。彼は今から100年くらい前の人ですが、彼は教育を机上で語るのではなく、シカゴ大学に自分の実験教室を作るわけですよ。私は、彼の研究スタンスを大変尊敬していて、その影響もあってここを作ったのかもしれない。だからある意味でアウラは、新しい教育のかたちを模索するためのワークショップのようなものかもしれない」

「アウラはできて10年くらいでしたよね。その10年の間に何か変わりました？」

「そうですね。一番変わったのは、教室の“磁場”かもしれないね。最初は私の中の理論とそれに基づく環境しかなかったわけですよ。するとどうしても、“磁場”が弱い。“磁場”が弱いと混乱が生じていくわけですよ。強制力がかからないのでね。ところが、だんだんアウラの“磁場”を私と生徒、そして先生と一緒に作れるようになっていく。みんながアウラの住人になっていくわけですよ。すると“磁場”はたちまち強いものになっていく。つまりアウラに関わる人と環境と一緒に“磁場”を構成できるようになっていったんです。こうなると、新しくアウラにやってくる生徒はその磁場に巻き込まれる形で自分自身をかえていこうとするわけなんです。これを 正統的周辺参加 というんです」

「なるほど、よくわかりますね。本来のコミュニティーのありかたですよ」

「そう思いますね」

「そういったアウラの良さは、口コミで広がっていくわけですか？」

「そうかもしれません。アウラは他の塾とは、根本的に違いますから...、ここまで特徴が強いと自然と目立ってしまいますよね。ただわかる人にはわかるけれど、わからない人にはわからないのかもしれませんが」

「確かにそうかもわかりませんが、アウラの良さをアピールして生徒を集めないといけないわけですよ」

「それは、民間の前提条件ですからね」

「評価測定じゃないですけど、アウラに来る前と来てからでどう変わるんですか？世間的には、テストの数値であったり、受験成果であったりするわけですが...」

「そこが難しいわけで、ここでは教科内容は媒介的に活用しているので、もっと目に見えない部分にフォーカスされている傾向があるんですね。もともと目に見えないので、それをどう表現するのかということはずと難解な課題になるわけです。すごい大きなコトバで表現すると、生徒の生き方が変わるとかいうことにもなるかもしれないのですが、そんな大きなコトバにしてしまうとどこか陳腐なものになってしまう。でも私たちが親からよく聞くのは“勉強への向き合い方が変わった”とか“生活の仕方そのものが変わった”とか“生まれ変わったようになりました”とか、そんな表現なんです。だからこれをどう表現するかを、私は今大学で研究しているんです」

「そんなアウラの哲学がある一方で、さっきのチラシの中の表現を見ると通常の学習っぽさも出てるじゃないですか、あのチラシでどこまでその北村さんの考え方が伝わるんだろうって思うんですよ。要は学ぶ姿勢を育てるということと、詰め込むべきものは詰め込むということのせめぎあいというか...」

「それは、例えば、東北の温泉に行った時に“ここは混浴ですよ”って言ったら、女の人は入れないわけですよ。だから、入り口は男風呂、女風呂となっていて、実は奥でそれがつながっている。そんな見せ方が必要だと思ったんです。“汽水性”という考え方があります。いろんなものが混ざっているんですよ。これもあるし、あれもある。このチラシでは、学習塾っぽい表現がある傍らで、生徒が撮ったアウラの教室の写真があるわけです。そして、その下には私の主張もさりげなく表現されている。あまりイデオロギーが強いと、ダメなんですよ」

「北村さんは親御さんの面談、もよくやってるんですか？」

「面談は、親の学びの機会です。アウラに関わってもらおうということは、だれもが学習者になるということなんです」

「小学校から来た生徒は、中学になっても来るんですか？」

「そうです。高校になっても通い続け、そして大学になってアウラの先生になるんです」

アウラに始めてやってきた人は、いったい何に興味を持つのか？そして私は、何を語りかけるのか？そんなことがこのエピソードから見えてくるのかもしれませんが。実際、アウラを一言で語ることは大変難しい。幾重にも重なる対話を通してはじめて、そこにアウラが浮かび上がってくるようなものかもしれません。